「ショートステイでの作業療法士の役割」
～他職種連携を通じ感じたこと～

ショートステイゆきよしとやの
〇中川　由子(OT)

ゆきよしクリニック
　高野　友美(OT)　　清水　美穂(OT)
　荻荘　則幸(MD)

はじめに

当施設は平成22年8月に開設された
単独型ショートステイである.
今回，当施設の利用目的を調査した結果
と開設からの取り組みをから，作業療法士
の役割を考察した.

施設紹介①

【定員】32名

【居室情報】32床

(4人部屋7室・2人部屋1室，個室2室)

【機能訓練指導員】

作業療法士　1名：月～金曜日の午前3時間

理学療法士　1名：水曜日の午前2時間

看護師3名　(常勤2名，非常勤1名)

施設内

居室

作業活動

個別リハビリ

施設紹介②

【作業療法士業務内容】

・身体機能評価，個別リハビリプログラムの立案
・理学療法士，看護師と分担し個別リハビリを実施.
・個別リハビリは本人や家族，介護支援専門員
　からの希望があった場合に実施.
・その他，環境設定や福祉用具の選定などの助言.

調査

【目的】

当施設利用者の利用目的を知るため

【対象】

平成24年4月の1ヶ月間で当施設を利用した68名

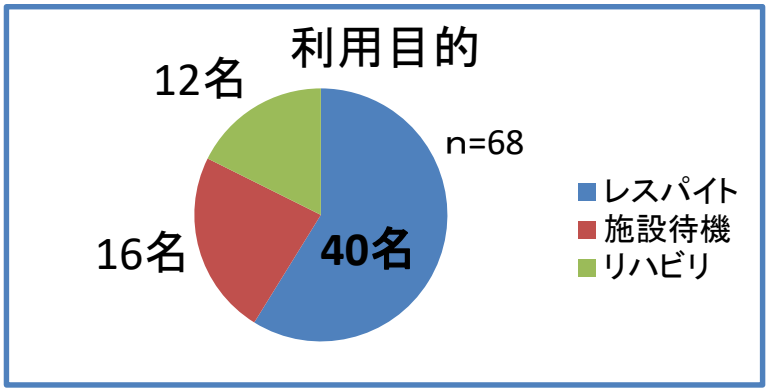
(男性38名,女性30名)

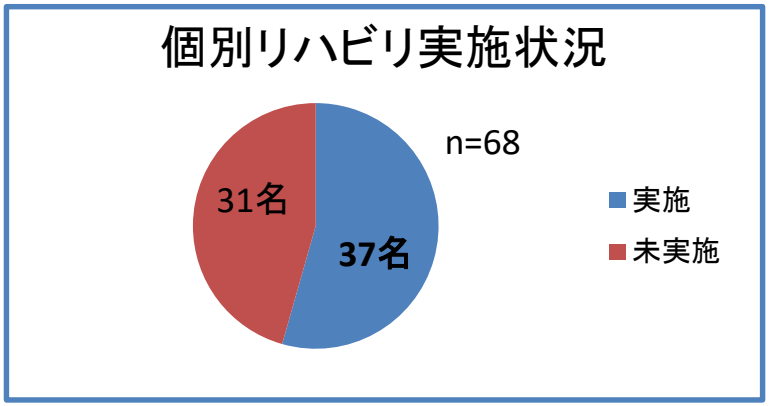
【調査項目】

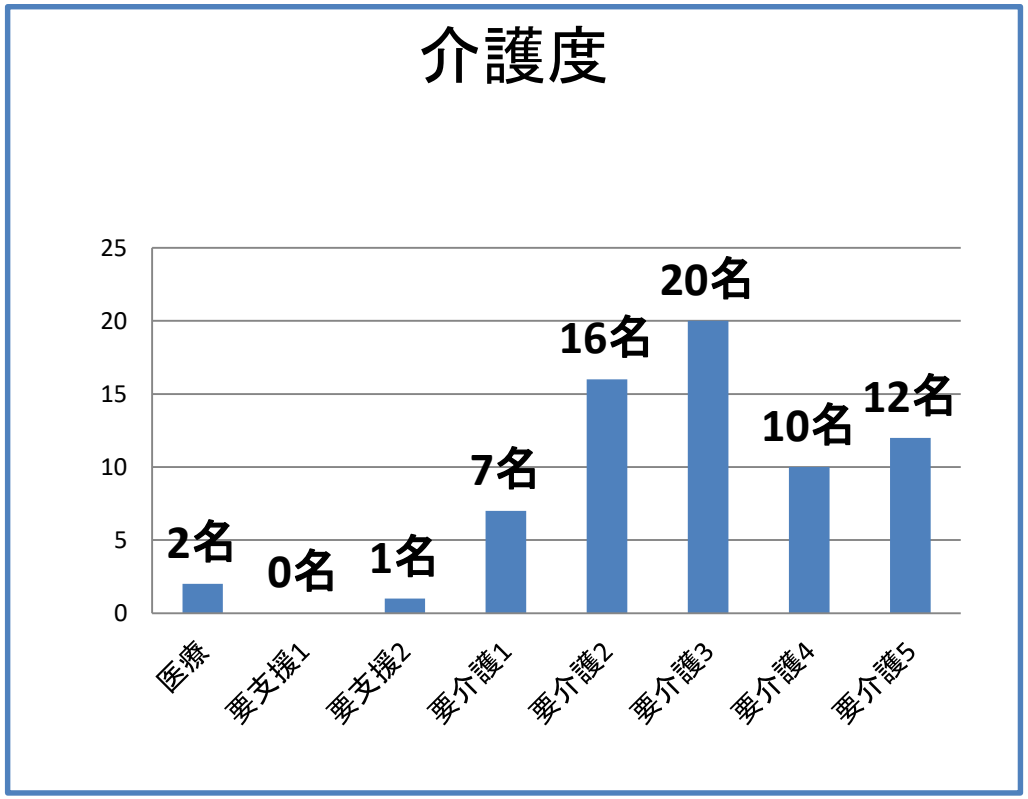
年齢，利用日数，利用目的，個別リハビリ実施状況，介護度を調査した.

結果①4月利用者の状況

- 平均年齢：78.3歳.
- 平均利用日数：12.4日.







結果②　利用者の傾向

理学療法士，作業療法士が配置されているショートステイは少ないため，個別リハビリを目的として当施設を利用している利用者は多いのではないか？

今回の調査(H24.4)

- 利用目的はレスパイトが多い
- 利用年齢の平均78.3歳
- 要介護度で最も多いのは要介護度3
- 個別リハビリ実施者は68人中37人

・ショートステイでのリハビリの認識が低い.

→リハビリの効果を検証していくことも重要

個別リハビリ以外での取り組み①

M・Yさん

74歳　女性　脳梗塞(右片麻痺、失語症)

転倒予防を目的に下肢筋力強化，歩行訓練を実施してきた.

食事中に手づかみで食べたり，むせることが多いと介護職員から報告がありOTが評価をした.

食器の選定を行い，声掛けを行うよう介護職員に申し送った.

その後，むせが軽減した.

個別リハビリ以外での取り組み②

Y・Kさん

67歳　男性　脳梗塞　(四肢麻痺)

移乗時の，転倒をきっかけに，当法人内の訪問リハ担当理学療法士，デイサービス介護職員を含む症例検討会を開催した.

訪問リハ担当理学療法士が介護職員に移乗動作の介助方法と注意点を伝え，移乗方法の統一した.

その後転倒事故は無くなった.

症例検討会後，訪問リハ担当理学療法士と相談してプログラムを立案し，ショートステイ利用中作業療法士が個別リハビリを実施した.

まとめ①

・食事場面の介入により施設内での連携

・症例検討会を通じて当法人内での連携

利用者の多くは在宅とショートステイを行き来しており，
在宅生活を支援することが望まれていると考える．

↓

法人内だけではなく介護支援専門員や家族，他施設との連携をとりながら支援していく必要がある．

まとめ②

- 現在，個別リハビリ希望者のみに評価を実施
  全利用者の心身機能，生活状況を把握する必要がある.
- 全利用者を評価し，他職種と情報交換，生活背景を把握した上で1人1人の状態に合わせた施設全体でのリハビリプログラムを立案することが作業療法士の役割である.
- 定期的な評価を行うことでリハビリ効果を検証していく必要がある.
- 施設内の連携にとどまらず，介護支援専門員や家族，他施設と連携し，利用者が安心し充実した生活を過ごせるよう支援していきたい.